

口永良部島の火山活動解説資料（令和2年3月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

口永良部島では、2月22日以降、噴火は観測されていません。

火山性地震は増減があるものの、多い状態が続いています。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量も多い状態が続いています。GNSS 連続観測では、島内の基線において1月頃から伸びがみられます。このように、火山活動が高まった状態となっています。

新岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が増加していることから、流下する火山ガスにも注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

令和元年10月28日に火口周辺警報（噴火警戒レベル3、入山規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1～6、図7-①、図8-①）

口永良部島では、2月22日以降、噴火は観測されていません。白色の噴煙が最高で火口縁上1,000m（2月：1,100m）まで上がりました。

16日に海上自衛隊第1航空群の協力により実施した上空からの観測では、新岳火口と古岳火口及びその周辺、島内の状況に特段の変化は認められませんでした。古岳火口では、火口底から白色の噴煙がわずかに上がっているのを確認しました。

23日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において、新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。新岳火口西側割れ目付近には依然として地熱域が存在するものの、2017年頃から地熱域の温度に大きな変化はありません。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（令和2年4月分）は令和2年5月13日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）。

・地震や微動の発生状況（図7-②③、図8-③④⑤、図9）

火山性地震は増減があるものの、多い状態で経過しました。25日には新岳西山麓のやや深いところを震源とする規模の小さな地震が発生しました。また、27日から28日にかけて、新岳火口付近の浅い場所を震源とする地震が増加しました。火山性地震の月回数は771回（2月：1,225回）でした。

震源が求まった火山性地震は18回で、新岳火口付近の深さ0kmから1km付近、新岳西山麓の深さ4km付近、口永良部島の西側の深さ7km付近に分布しました。

火山性微動は観測されませんでした。

・火山ガスの状況（図7-④⑤、図8-②）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態で経過し、1日あたり700～2,100トン（2月：300～1,700トン）と前月より増加しました。

・地殻変動の状況（図10～11）

GNSS連続観測では、島内の基線において1月頃から伸びがみられます。



図1 口永良部島 噴煙の状況（3月6日、本村西監視カメラによる）

白色の噴煙が最高で火口縁上1,000m（2月：1,100m）まで上がりました。

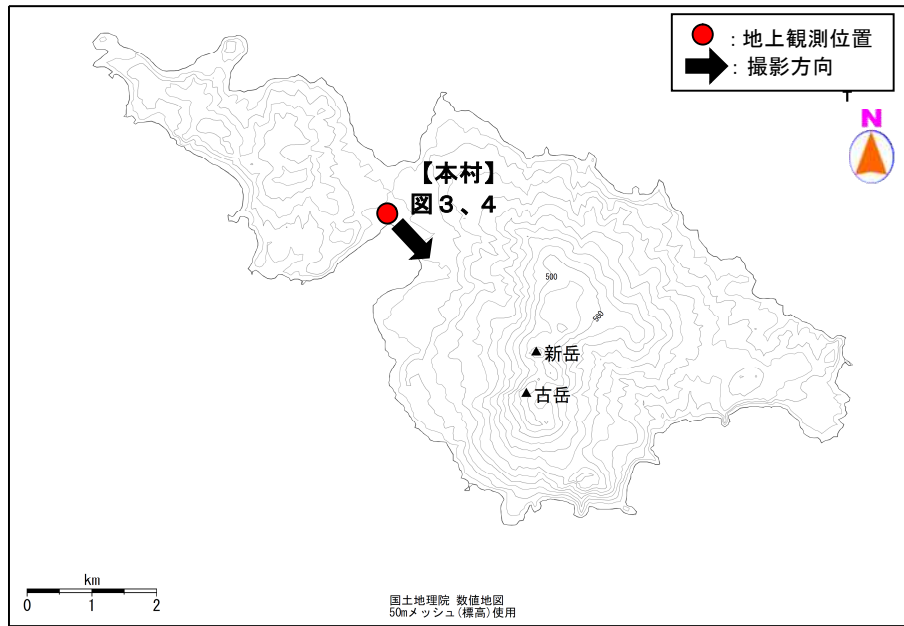


図2 口永良部島 現地調査観測位置及び撮影方向

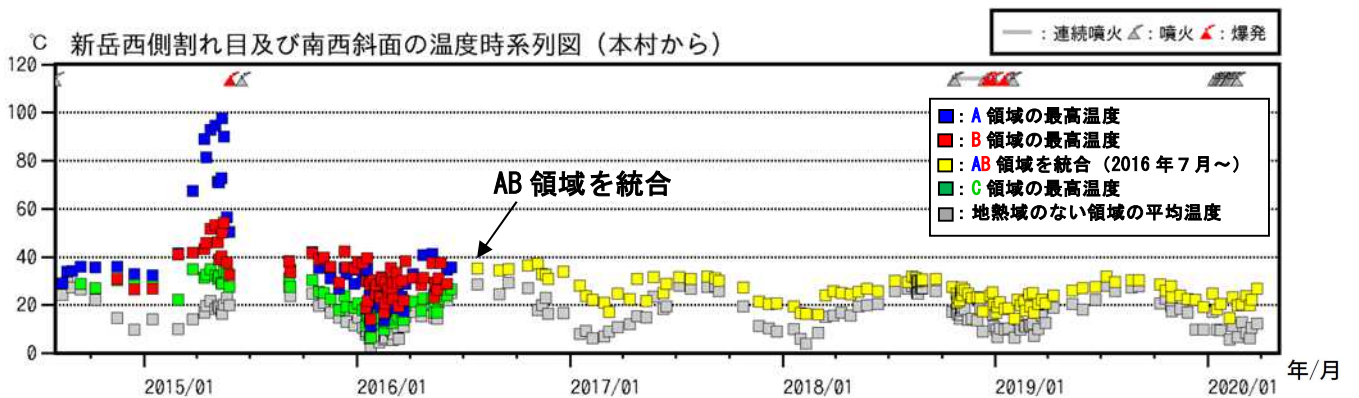
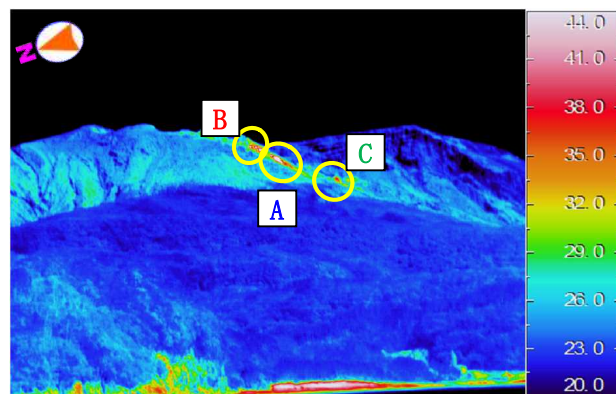


図3 口永良部島 新岳西斜面及び新岳南西側斜面の地熱域の温度時系列（2014年8月～2020年3月）

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近（AB領域）には依然として地熱域が存在するものの、2017年頃から地熱域の温度に大きな変化はありません。

2016年7月よりA領域とB領域を統合しています。
2016年7月以降、C領域で地熱域は観測されていません。

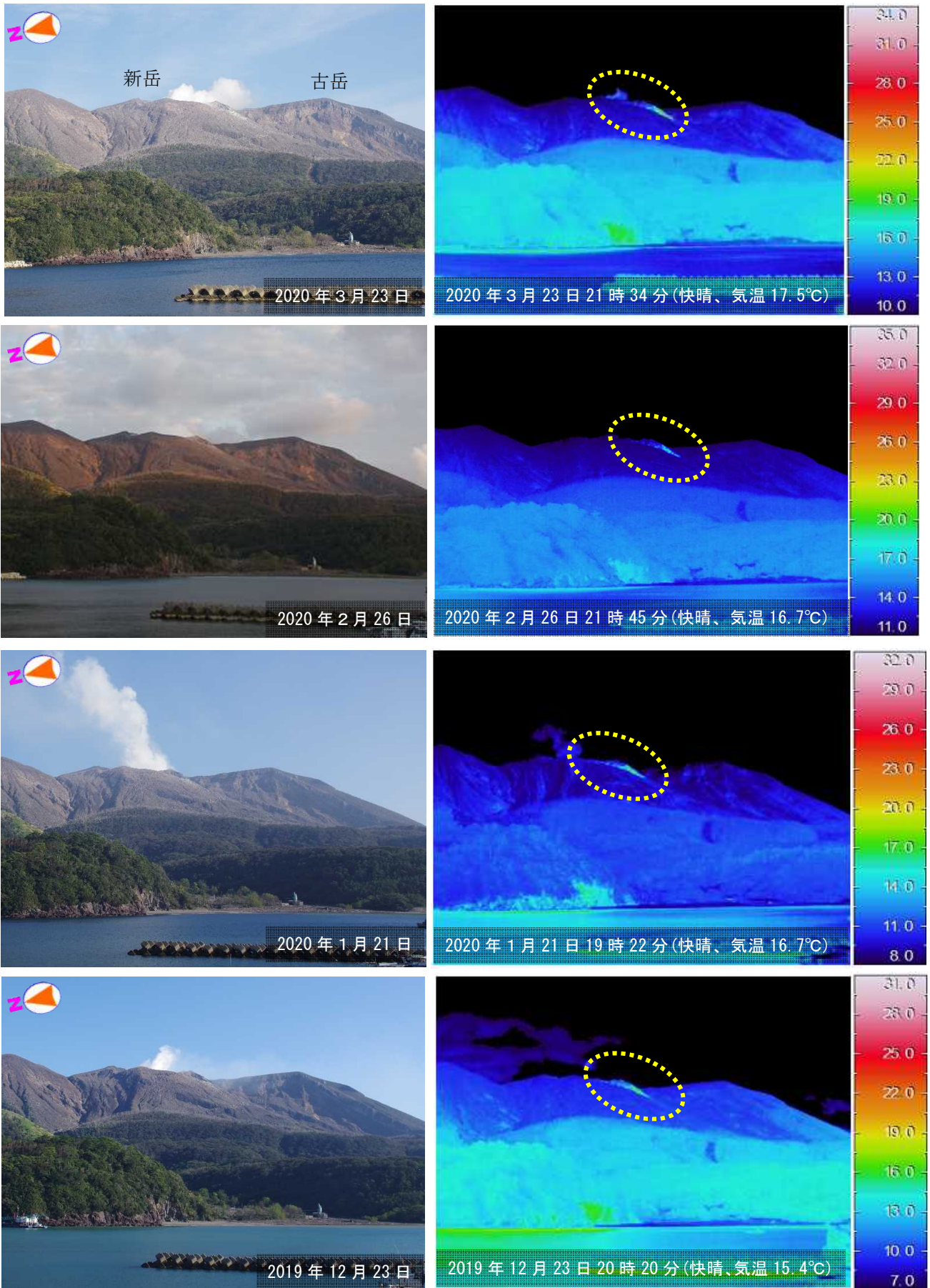


図4 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）
 3月に実施した現地調査では、地熱域（黄破線）に特段の変化は認められませんでした。



図5 口永良部島 観測位置図（16日 上空からの観測）



図6-1 口永良部島 新岳火口の状況
過去の観測（2019年2月21日）と比較して特段の変化は認められませんでした。

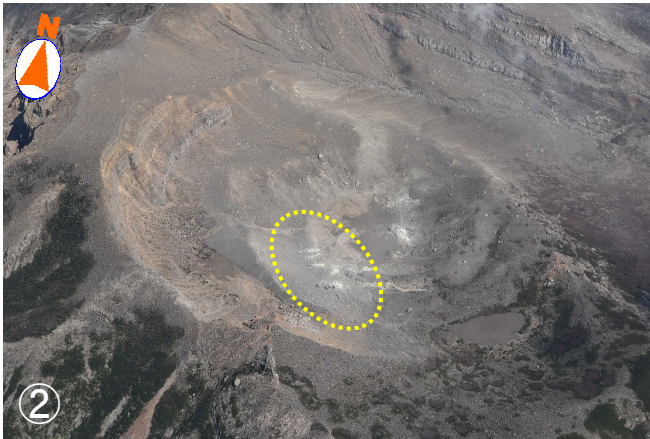


図 6-2 口永良部島 古岳火口の状況

- ・古岳火口では、火口底から白色の噴煙がわずかに上がっているのを確認しました。
- ・古岳火口周辺では、過去の観測と比較して特段の変化は認められませんでした。

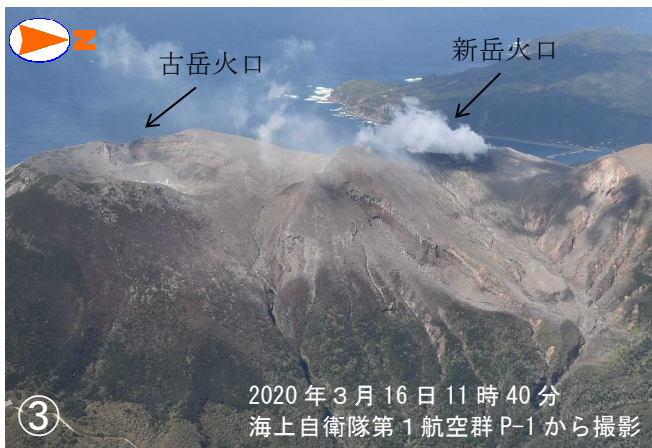


図 6-3 口永良部島 新岳及び古岳の火口とその周辺の状況

新岳火口東側斜面と古岳火口周辺では、これまでの観測と比較して特段の変化は認められませんでした。



図 6-4 口永良部島 島内の状況

過去の観測（2020年1月21日）と比較して特段の変化は認められませんでした。

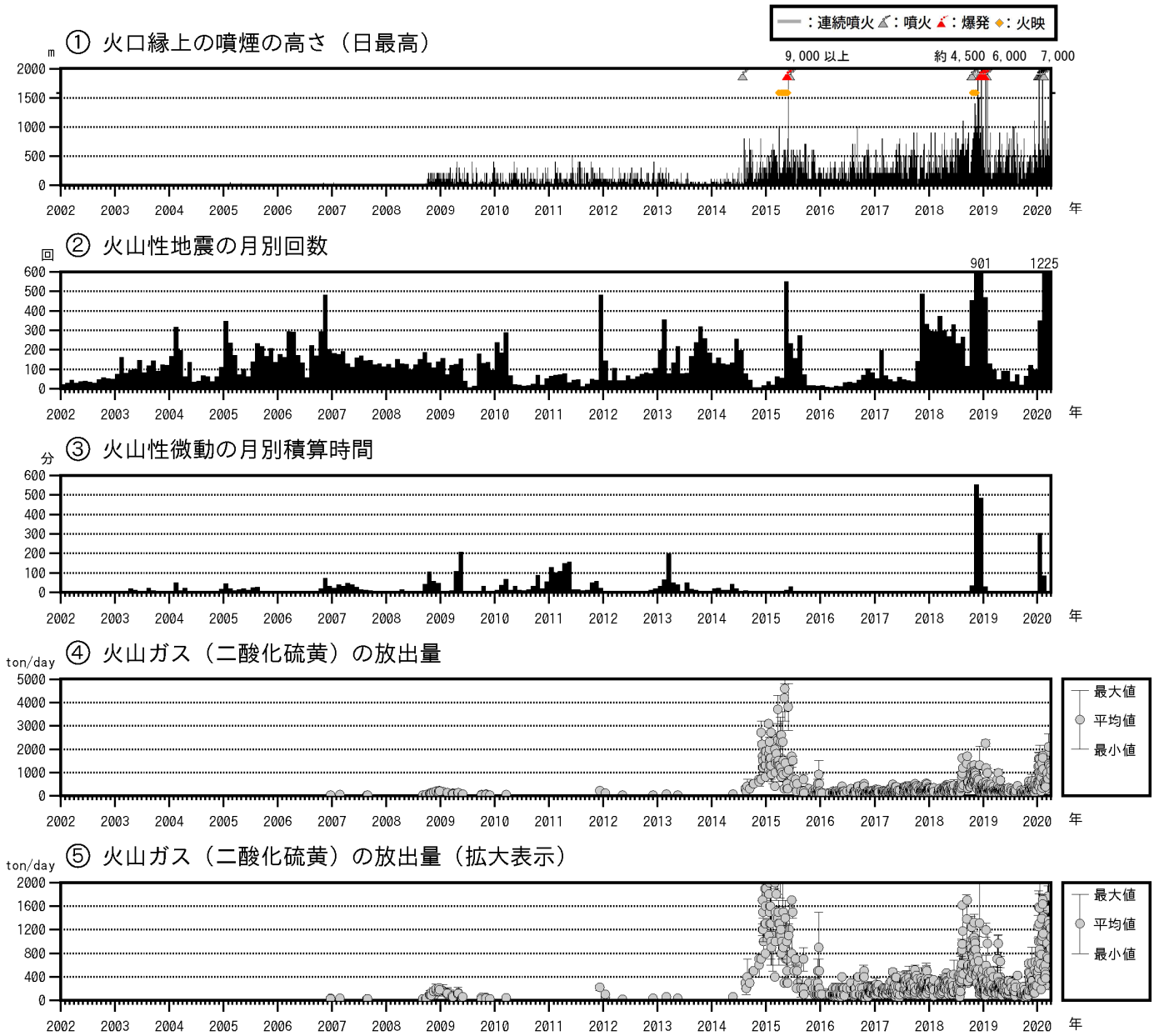


図7 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2020年3月）

火山性地震及び火山性微動は、「野池山3（上下動 $8.0\mu\text{m/s}$ ）」「FDKL（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳西山麓（上下動 $3.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳北東山麓（上下動 $1.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳北（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳南山麓（上下動 $4.0\mu\text{m/s}$ ）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。

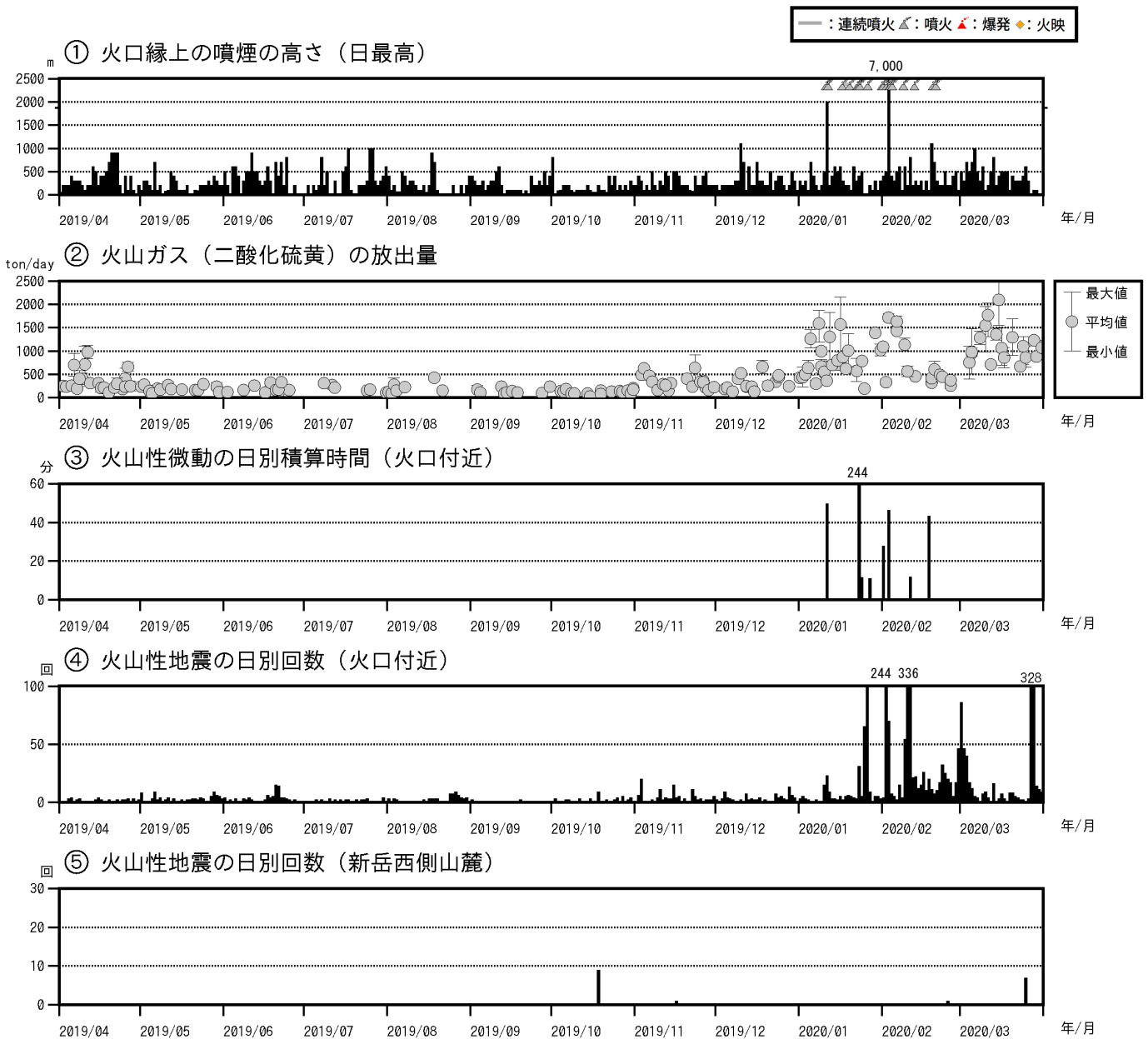


図8 口永良部島 最近の火山活動経過図（2019年4月～2020年3月）

< 3月の状況 >

- ・口永良部島では、2月22日以降、噴火は観測されていません。白色の噴煙が最高で火口縁上1,000m（2月：1,100m）まで上がりました。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は多い状態で経過し、1日あたり700～2,100トン（2月：300～1,700トン）と前月より増加しました。
- ・火山性地震は増減があるものの、多い状態で経過しました。
- ・25日には新岳西山麓のやや深いところを震源とする規模の小さな地震が発生しました。
- ・27日から28日にかけて、新岳火口付近の浅い場所を震源とする地震が増加しました。
- ・火山性地震の月回数は771回（2月：1,225回）でした。
- ・火山性微動は観測されませんでした。

②のグラフは観測を複数回実施できた場合に最大値・平均値・最小値を表記しています。

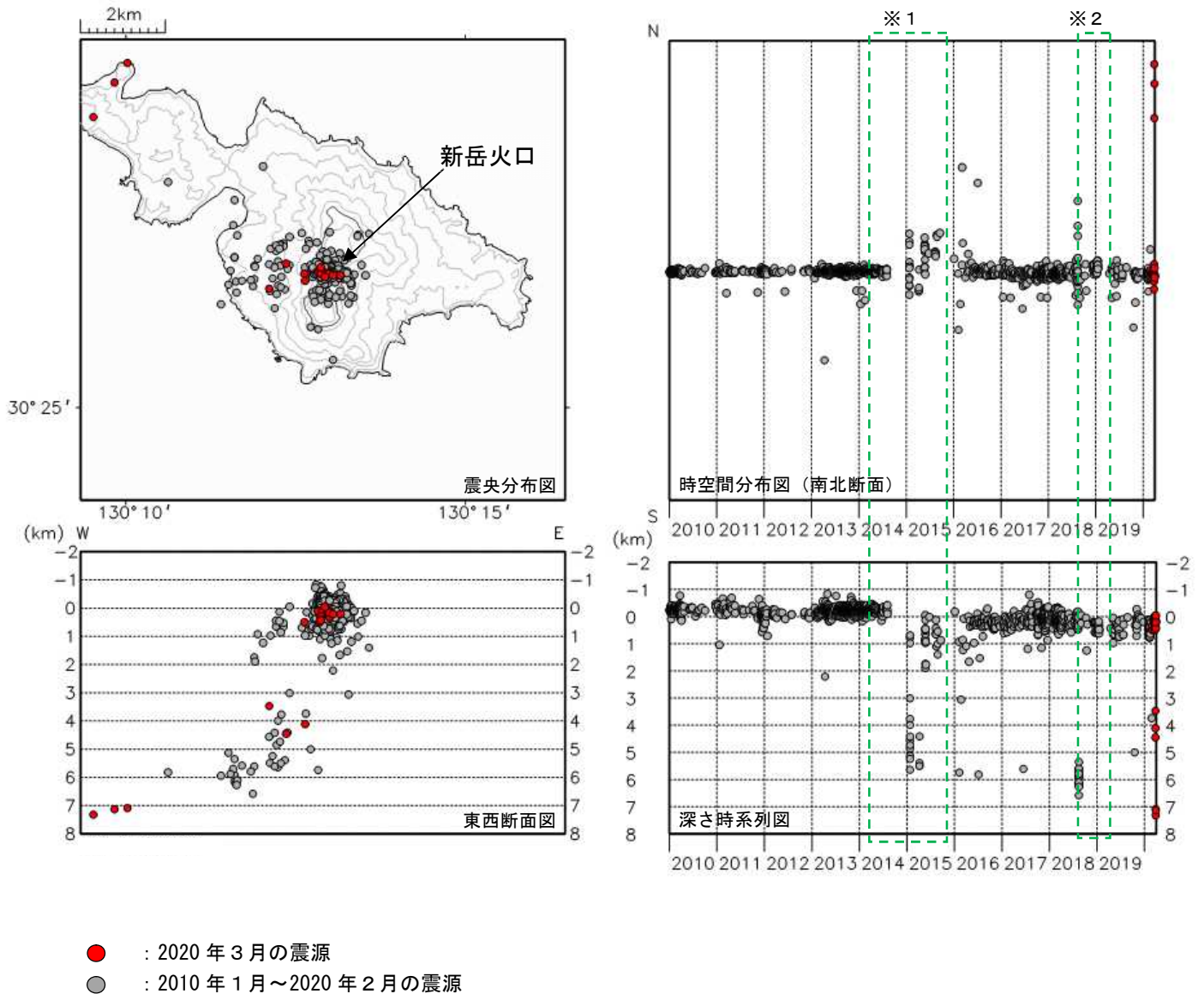


図9 口永良部島 震源分布図（2010年1月～2020年3月）

< 3月の状況 >

震源が求まった火山性地震は18回で、新岳火口付近の深さ0 km から1 km 付近、新岳西山麓の深さ4 km 付近、口永良部島の西側の深さ7 km 付近に分布しました。

- ※1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2016年5月31日まで（図中緑破線枠）は検知力や震源の精度が低下しています。
- ※2 2019年1月17日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2019年10月8日まで（図中緑破線枠）は検知力や震源の精度が低下しています。

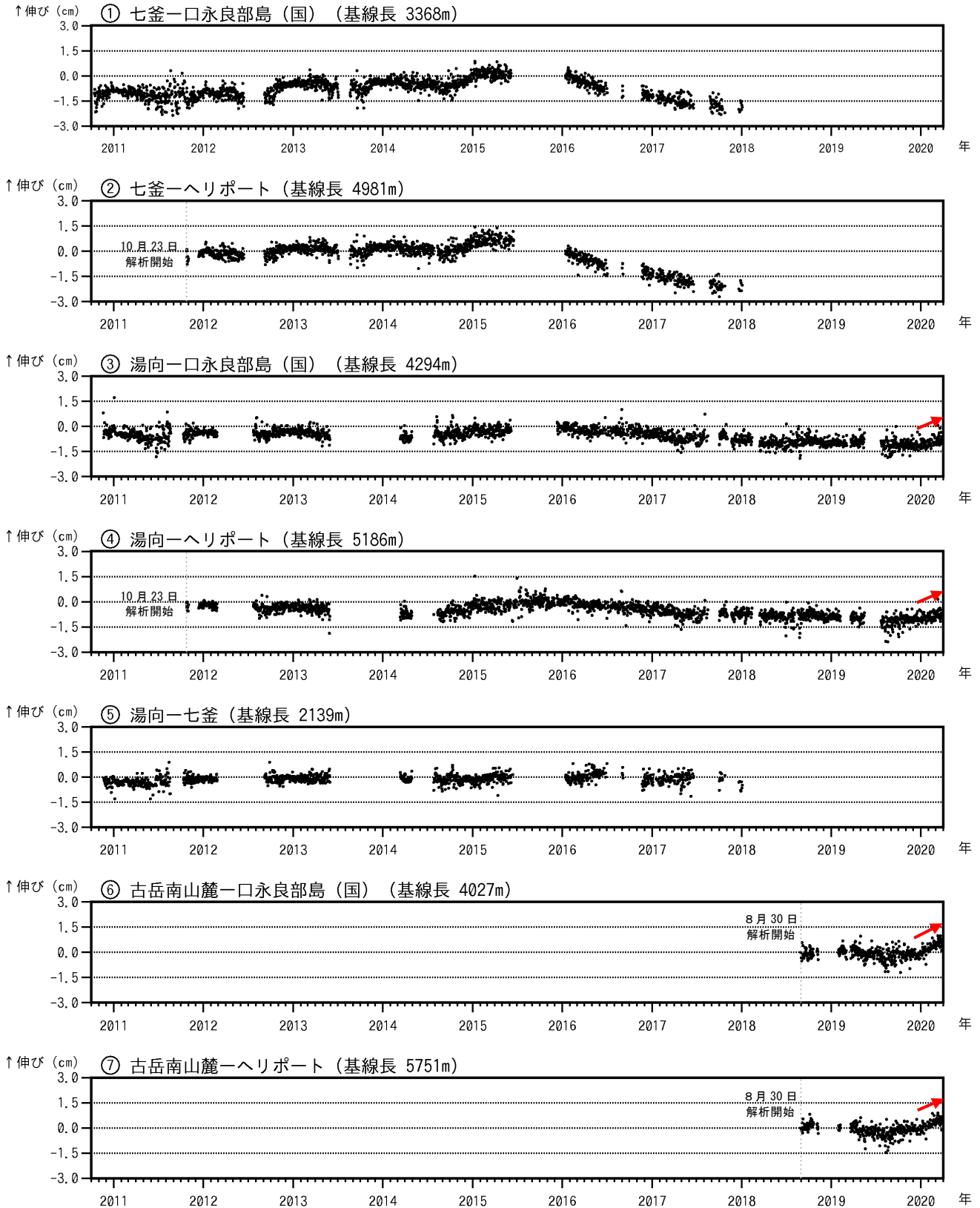


図10 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月～2020年3月）

GNSS 連続観測では、島内の基線において1月頃から伸びがみられます。

これらの基線は図11の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

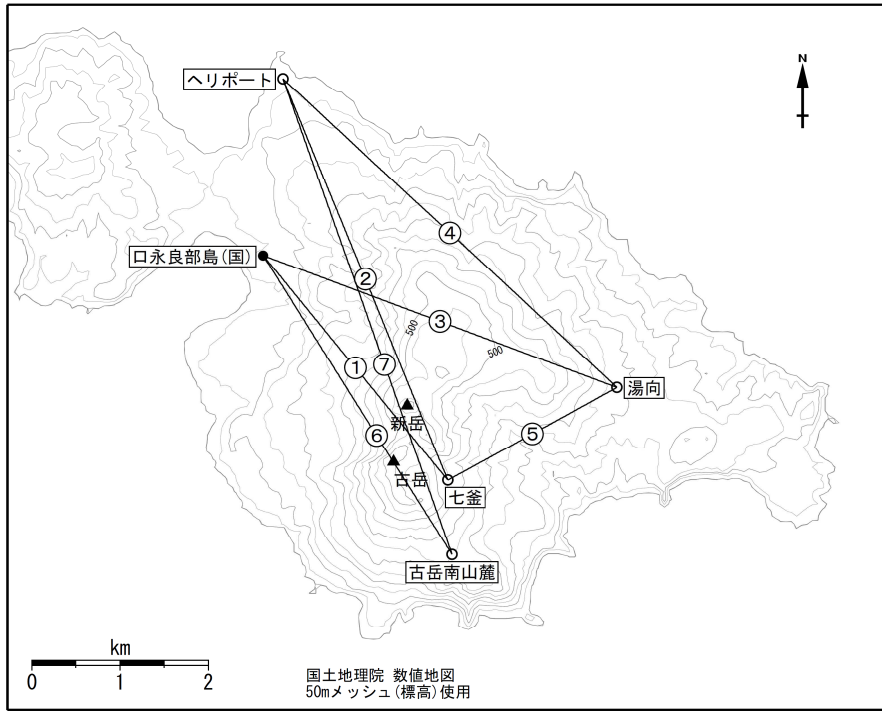


図 11 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院

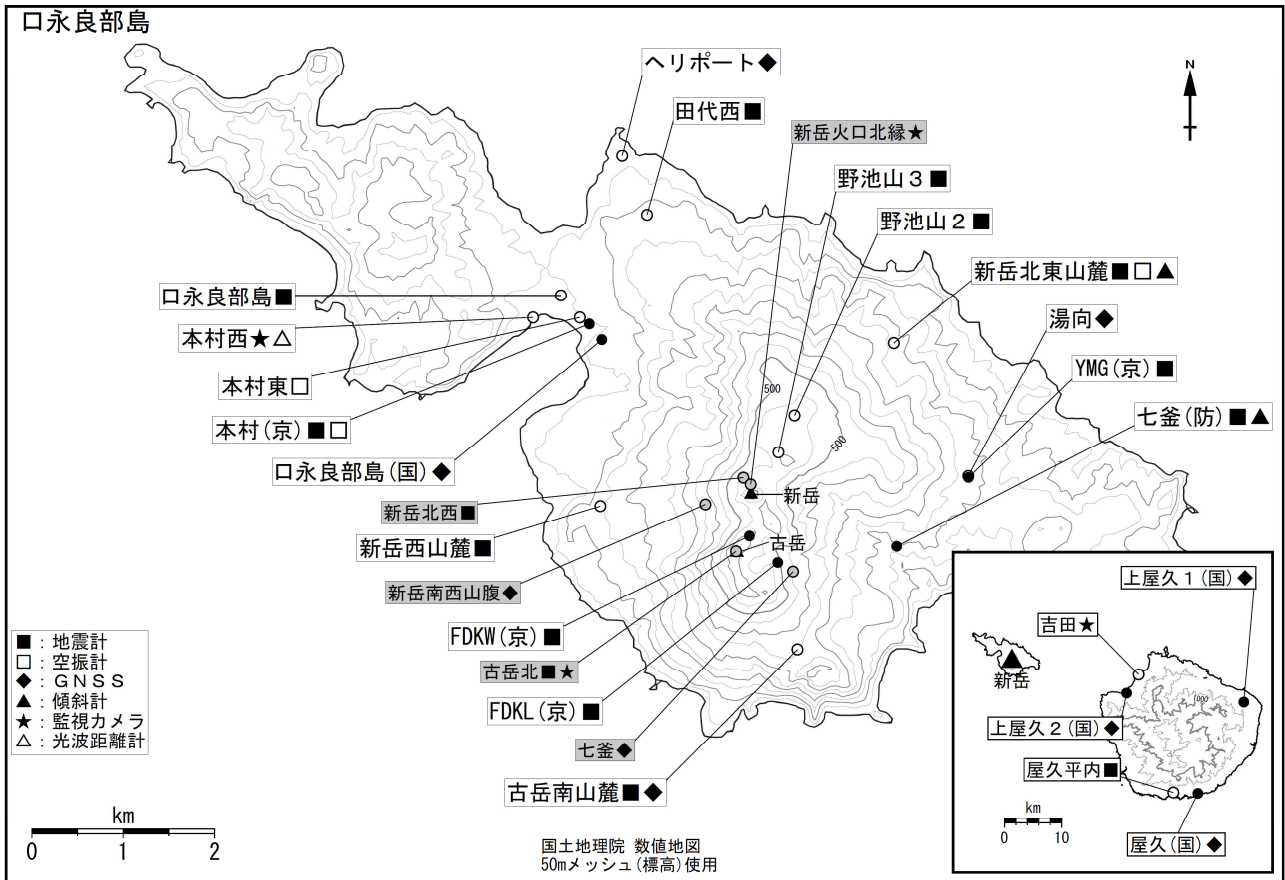


図 12 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。